JAAF
Japan Association of Athletics Federations

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

contents

【資料】

高校トップレベルの男子棒高跳選手における跳躍動作の特徴
－高校記録保持者の跳躍を対象として－

高校生における陸上競技の継続および非継続に関係する要因

帽子着用が暑熱環境下の長距離走に及ぼす影響

【特集企画】

若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向

【日本陸連科学委員会研究報告　第15巻（2016）】

【日本陸連医事委員会エキサイティングメディカルレポート】

公益財団法人日本陸上競技連盟

写真提供：フォート・キシモト

陸上競技研究紀要

Vol.12, 2016
ISSN1349-7596

スポーツくじ
toto
BIG

「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

１．投稿資格について

特に制限は設けない.

２．投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので，内容に応じて，総説，原著，資料，指導法および指導記録の報告などに分類される．スタイルは和文，英文のどちらでもよい.

投稿論文には上記の投稿種別を明記し，英文のタイトル，著者，所属，総説および原著には要約（150 語以内）をつける.

(注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は，編集委員会にその旨をご相談ください)

３．採否等について

原稿は査読を行い，査読結果をもとに採否および掲載順序の決定，校正などは編集委員会が行う.

４．原稿の書き方について

原稿は原則として，ワードプロセッサーで作成する．本文は，横 42 文字×縦 38 字で 1 頁とする.（1 頁は約 1600 字,刷り上がり 10 頁以内，図表もその頁数に含む，すべて白黒にて作成）

英文は，A4 サイズタイプ用紙を使用し，15 枚以内を原則とする.

計量単位は，原則として国際単位系（m，kg，sec など）とする.

また，英文字および数字は半角とする.

５．文献の書き方について

本文中の文献は，著者（発行年）という形式で表記する.

例） 田中（1996）は ------

文献は，原則として，本文最後に著者名の ABC 順で記載する．書誌データの記載方法は，著者名（発行年)，論文名，誌名，巻（号)，ページの順とする.

例）吉原　礼，武田　理，小山宏之，阿江通良（2006） 女子棒高跳選手の跳躍動作 のバイオメカニクス的分析．陸上競技研究紀要，2: 58-64.

伊藤　宏（1992） 陸上競技の発育・発達．陸上競技指導教本―基礎理論編―． 日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72.

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a,b,c をつける.

例） 田中ら（1996 b）は，――――

６．原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの 1 部を郵送する.

〒 163-0717
東京都新宿西新宿 2-7-1
小田急第一生命ビル 17 階
日本陸上競技連盟
「陸上競技研究紀要」編集委員会宛
(Tel 03-5321-6580 Fax 03-5321-6591)
E-mail: kiyou @ jaaf.or.jp

７．原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う．ただし、2016 年度版は，2017 年 1 月末日とする.

８．その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する.

(2016 年 12 月　改訂)

あ　い　さ　つ

公益財団法人日本陸上競技連盟
専務理事　尾縣　貢

昨夏に開催されました第31回オリンピック競技大会での男子4×100mリレーの銀メダル、男子20km競歩の銅メダルのインパクトは非常に強いものでしたが、一方で入賞数では目標を下回り、課題も浮き彫りになりました。2020東京の成功に向けては、残された期間においては陸上競技関係者の総力を結集して準備を進めていかなければなりません。

昨年11月には、伊東浩司氏をトップとする強化新体制がスタートし、2020年に向けた斬新な強化戦略が公表されました。この中には、情報・医科学サポートの有効活用が挙げられています。これぞ、わが国のアドバンテージであり、これまでの積み上げてきた研究成果をコーチング現場に活用していかなければなりません。加えて、現場での課題を解決するためのテーラーメード型の医科学サポートを推進することも大切になります。例えば、“銀メダルを獲得したリレーのバトンワークの精度をより高いものする”“極めて厳しい暑熱環境下で実施されるマラソンレースで力を発揮するための諸策を探求する”といった課題の解決のためには情報・医科学の力を借りる必要があります。

2020年での成功を目指しつつ、オリンピック以降のレガシーの構築を念頭に置いた活動も重要になります。次に続く「若手競技者の育成」は、その最たるものでしょう。多くの子どもたちが長く陸上競技を続け、その中で余すことなく自分の潜在力を発揮できるような仕組みづくりは、恒久的なテーマだと言えます。

今回は、特集として「若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向」を取り上げており、まさしくこの課題解決の糸口を見つけることができるものと考えます。また、３編の投稿論文や2016年度の科学委員会の活動報告も競技者の育成や強化に資する価値あるものです。

経験と科学的知識の融合を目指し、コーチング活動を積み上げていただくことにより、より大きな成果が得られるものと思います。陸上競技紀要がその一助となれば、幸甚に存じます。

陸上競技研究紀要
Bulletin of Studies in Athletics of JAAF
Vol.12　2016

目　　次

【資料】
高校トップレベルの男子棒高跳選手における跳躍動作の特徴
　－高校記録保持者の跳躍を対象として－
・・・・・柴田篤志ほか・・４

高校生における陸上競技の継続および非継続に関係する要因
・・・・・・渡邊將司ほか・・11

帽子着用が暑熱環境下の長距離走に及ぼす影響
・・・・・吉塚一典ほか・・21

【特集企画】
若い競技者の育成モデルをめぐる世界の動向
・・・・・・・・・・・・・・29

【日本陸連科学委員会研究報告　第 15 巻（2016）陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2016】
・・・・・・・・・・・・・・69

【エキサイティング　メディカル　レポート】
・・・・・・・・・・・・・・161